

6月20日 「世界難民の日」



6月20日は「世界難民の日」

※本部作成のパンフレットより(原文は英文)

国連総会で、もともと「アフリカ難民の日」であったこの日(6月20日)が「世界難民の日」と定められ、以来、難民保護への世界的な関心を高める日となりました。

さて、今年のテーマは「難民であることの勇気」です。辞書には、勇気とは、「危険、恐怖、または困難にあえて立ち向かい、耐え、^{あらが}抗う精神または心の強さ(Webster's New Collegiate Dictionaryより)」とあります。

平和な生活を送る私たちには、自分の勇気を試される機会などめったにありません。難民も普通の人々でありながら、自らの過失ではないのにいつの間にか異常な状況に置かれています。そして辞書にあるように、内なる強さのなかから「恐怖を乗り越える能力」を見つけないてはならないのです。

そのような恐怖とは、最初は戦争や迫害から逃れなくてはならない差し迫った恐怖であったり、故郷や愛する人を失う痛みであったり、逃避の苦しみかもしれません。後には、まったく新しい環境で、あるいはもはや歓迎されないかもしれない故郷で、自分たちの生活をどう再建すべきかという先が見えない強い不安が襲ってきます。

難民には勇気が必要です。希望を捨てずにいるのも勇気がいります。受けた支援を最大限に生かす勇気。どんなに見通しが暗くても新しい生活をスタートさせ、やがては貢献でき、社会を豊かにする一員となる勇気。このような勇気が必要なのです。

典型的な難民などいません。誰もが異なる過去をもち、誰もが他人には分からない喪失感をもっています。しかし世界では異なる危機が、異なる人々を苦しめています。ほぼ解決された危機もありま

すが、新たな危機により新たな難民問題が生まれているところもあります。そのほかにも、革命家たちが市民を代表する

という建前のもとに起こしたゲリラ戦が長期化し、まさに一般市民が犠牲になっています。

コロンビア

マリア



マリアは17歳だというのに、もう未亡人となってしまった。彼女が住んでいた人里離れた村は、昨年、武装グループに襲われ、男たちは撃ち殺され、家屋には火が放たれた。恐怖に駆られ、マリアは森の奥深くに逃げ込み、何日もさまよい歩き、身を隠し続けた。身分証明書を持たないまま疲れ果て血を流しながら、たどり着いたのは親切な村だった。今では首都ボゴタの施設でUNHCRの援助を受けている。UNHCRから身分証明書ももらった。マリアは辛い経験を振り返らず、新たな希望と基礎教育を武器に、まだ若い人生をこれからやり直す計画だ。

アフガニスタン

イブラヒム



ソビエト連邦の崩壊、タリバンの残虐な行為、アメリカ主導の軍事介入など戦争の余波はいつもイブラヒム一家を苦しめてきたようだ。7-8年前、一家は、非道なタリバンから逃れるために首都カブールを脱出。ほとんどを徒歩で雪道や丘を越え、凍った川を渡り、飢えをこらえながらの恐ろしい冬の旅の後、UNHCRが支援するパキスタンの難民キャンプにたどり着いた。それから長い年月が過ぎ、ついに一家は夢に見た故郷カブールへの帰還を果たした。自宅は爆撃で枠組みだけになっていた。だがイブラヒムは、若くない^{もち}体に鞭打って、家族の住む家建て直すことを心に決めている。勇気と決意、それにUNHCRから支給された住宅建設用品で、いまや「元」難民である誇り高い彼は、きっと再建をやり遂げるに違いない。

勇気のある人々の横顔

「世界難民の日」にあたり、今年はUNHCRが保護する難民や避難民、約1700万人のうち、それぞれ異なる地域出身の5人の横顔を紹介します。当然ながら、彼らの本名は明らかにしていません。

ん。けれども彼らに代表される難民の勇気は、まちがいなく本物です。

難民の勇気を讃えよう

「世界難民の日」は、世界の難民の不屈の精神と勇気に敬意を表する日です。

難民の勇気は、危険や暴力に耐えるだけでなく、厳しい環境や不慣れな環境であっても、生活を建て直し、社会に貢献するところに現れています。

ベトナム

フー・ホン博士



フランスで教育を受けた医師のフーは、政府に目を付けられた。命の危険を感じたフーは、ベトナムを出るには船でマレーシアに逃れるしかないと、1989年、他の脱出者、十数名とともに粗末で甲板もない漁船に乗り込んだ。20日後、脱水症状と全身日焼けによる水ぶくれで、乗船者はフーを含め8人になっていた。しかし彼らはクアラルンプールに近いスンゲイ・ベシ・キャンプにたどり着いていた。のちにフーはUNHCRの支援によってカナダに第三国定住し、そこで一から英語を学び、小児科医の資格を再び取得した。熱帯地方のベトナムで育ったフーにとって、カルガリーの厳しい冬に慣れるのも生易しいことではなかった。

ボスニア・ヘルツェゴビナ(サラエボ)

ハナ



スウェーデンのゴテンベルグの安全なアパートにいる今も、恐怖の日々を振り返るとハナは信じられない思いがする。一体どうして隣人が、何世代も前からの友人が、突然激しく自分を憎むようになったのか。何世紀も隣人として力を合わせてきたのに、なぜ民族浄化という言葉のない凶悪な行為が突然爆発したのか。サラエボ包囲中に受けた爆撃で家から逃れなければならなかったハナは、闇夜にまぎれて敵陣を突破し、避難することができた。数週間さまよい歩いた後、ついに西ヨーロッパにいる旧ユーゴスラビア難民70万人の一人となった。1995年に難民としてスウェーデンで受け入れられ、2児の母であると同時に、キャリアウーマンであり、かつ地元の副市長として成功を収めている。

スーダン(ダルフール地方)

グローリア



砂っぽいスーダン西部のダルフール地方で、グローリアが細々とでも、それなりに暮らしていたのはわずか半年前のことだ。現在、彼女は隣国チャドの国境にあるUNHCRの難民キャンプのテントで、1日ひとつかみ程度のトウモロコシを食べながら、故郷に帰る日を辛抱強く待っている。すべての始まりは、民兵が村を襲い、銃やナタで虐殺を始めたときだ。死んだふりをしてたグローリアは、夜を待って、砂漠に逃げた。何日も歩き続け、昆虫や木の根で食いつなぎ、強風に煽られた砂に絶え間なく襲われながら、ついにUNHCRの現場（を巡回する）チームに発見された。苦難はようやく終わり、恐怖は過去のものとなった。だがグローリアは、かつての生活が懐かしい。彼女は今、希望を持ちつつ暮らしている。いつかきっと故郷に帰ると。



6月20日は「世界難民の日」

難民のために働く勇氣

難民がいる危機の現場には、必ず UNHCR の職員がいます。ときには彼らの命も難民と同じ危険にさらされ、命が失われる場合もあります。そのような職員の一人がバンサン・コシェテルです。彼は、ロシアの UNHCR 北コーカサス事務所長を務めていたとき、ほぼ1年間、毎日死の恐怖にさらされながらも、運良く生還しました。

1998年のある晩、バンサンがアパートの

ドアを開けると覆面をした3人の男たちが銃を持って立っていた。彼らは室内になだれ込むと、バンサンをひざまずかせた。「背後から頭を撃ち抜かれると覚悟した」とバンサンはその時を振り返って言う。だがそれから3日間、彼は車のトランクに押し込まれ、317日間にわたる悪夢のような恐ろしい拉致が始まった。バンサンは常に殴られ、処刑の真似事をされ、手錠をはめられたまま暗い地下室に閉じ込められた。太陽の光をみたのは1度しかない。逃亡の試みが発覚してからは、9か月間手錠をはめられ、1メートルほどのケーブルでベッドにつなが

れた。歩けたのはさっぱり4歩だけだった。「よく5歩目を踏みだすことを夢に見ていた」とバンサンは後に語っている。

ロシアの特殊部隊が激しい銃撃戦の末、バンサンを救出する4日前、他の4人の人質が残酷にも殺された。「なぜ他のみんなは殺されて私だけが助かったのか」と、バンサンは悩んだ。けれども、とにかく彼は生還し、10か月間もテロリストによって捕らわれていたにもかかわらず、再び UNHCR に戻って人道支援に携わっている。バンサン・コシェテルの経験は、まさに並外れた勇氣の物語である。

あなたも6月20日の「世界難民の日」を機に、 難民のことを考えてみませんか？

①パリナック(PARinAC) 2005 講師派遣活動

UNHCR と難民の保護・支援において協力活動を行う NGO (非政府組織) によって形成されるパリナックでは講演会の主催

者を募集し、パリナック加盟団体から講師を派遣しています。関心のある方は、右記のホームページをご覧ください。

www.unhcr.or.jp/news/info/parinac/

②新写真パネルセットの貸し出し

「世界難民の日」に向けて新しい貸し出し写真パネルを作成しました。あなたのお住まいの地域で展示会を開きませんか。関心のある方は、下記までご連絡下さい。

日本国連HCR協会
03-3499-2450
<http://www.japanforunhcr.org>

●パネルの内容

アフリカ、アジア、ヨーロッパそして南米の難民・避難民の姿をとらえた写真パネル (20点) と「難民とは」「世界難民の日」など説明パネル (4点) で構成されています。

●サイズと点数

全24枚

説明パネル A2サイズ (59.4×42cm) 4枚
写真パネル 半切サイズ (35.1×42.7cm) 20点
(写真の説明はついています。)

*なお、恐れ入りますが、パネルの送料のご負担をお願いしています。



ミャンマー国境に近いタイのタムヒン難民キャンプ。約1万人のミャンマー難民が狭い敷地内で暮らす。UNHCR/R. Hakozaki



グルジアから北オセチアに逃れた難民を収容するために設けられた54か所のセンターのひとつ、ギゼル・センター。ここは元ホテルであった。
UNHCR/V. Soboleva

写真展

「アンゴラ難民とザンビアの人々」開催

東京事務所では、今年も「世界難民の日」にあたり写真を通して難民を知っていたく場として、写真展を開催します。

「世界難民の日」写真展

「アンゴラ難民とザンビアの人々」

●開催期間：2005年6月18日(土)～

7月13日(水)

初日の6月18日を除き

土・日は閉館

●開催時間：10:00～17:30 (18:00閉館)

●場所：UNハウス(国連大学ビル)1・2階
UNギャラリー

渋谷区神宮前5-53-70

(地下鉄「表参道」駅B2出口から徒歩5分、JR「渋谷」駅東口から徒歩8分)

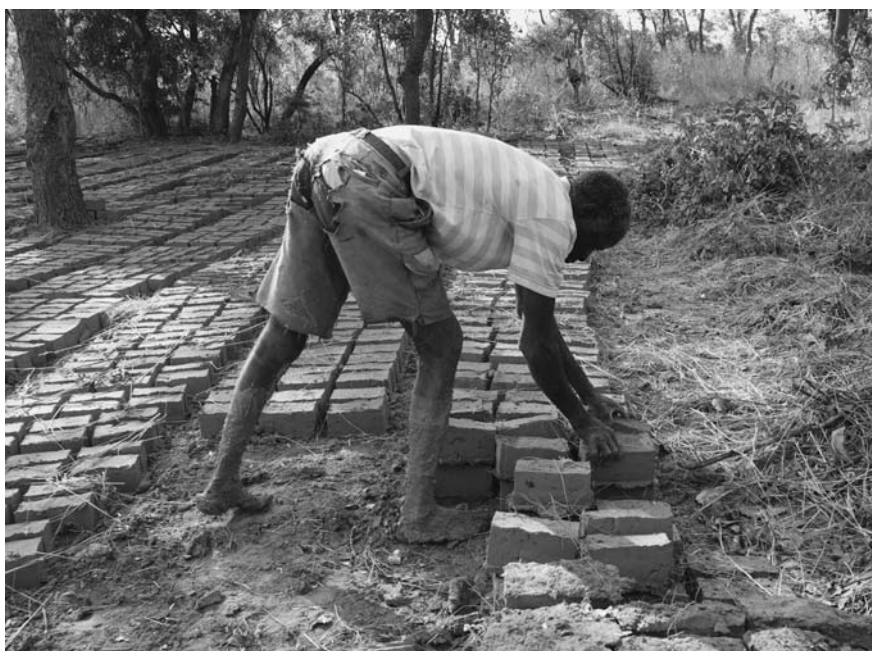
●入場料：無料

●内容：ザンビアで暮らすアンゴラ難民と
地元の村民の様子など

(撮影 写真家 沼田早苗さん)

●協力：日本国連HCR協会

●後援：外務省



レンガを焼く準備をする(ザンビア・イニシアティブのプロジェクトの一つ) 撮影：沼田早苗



難民生活に別れを告げて(アンゴラに帰る難民)
撮影：沼田早苗

スライド&トークショー

(沼田早苗さんほか)

●日時：2005年6月23日(木)

午後2時より、約2時間

●場所：UNハウス
(国連大学ビル)2階
レセプションホール

●入場料：無料

●事前に申し込みが必要です。
ホームページにある申し込み用紙
を電子メールでお送りいただくか、
ファックスでお送りください。

詳しくは、www.unhcr.or.jpをご覧ください。



希望を胸に(アンゴラに帰る難民)
撮影：沼田早苗



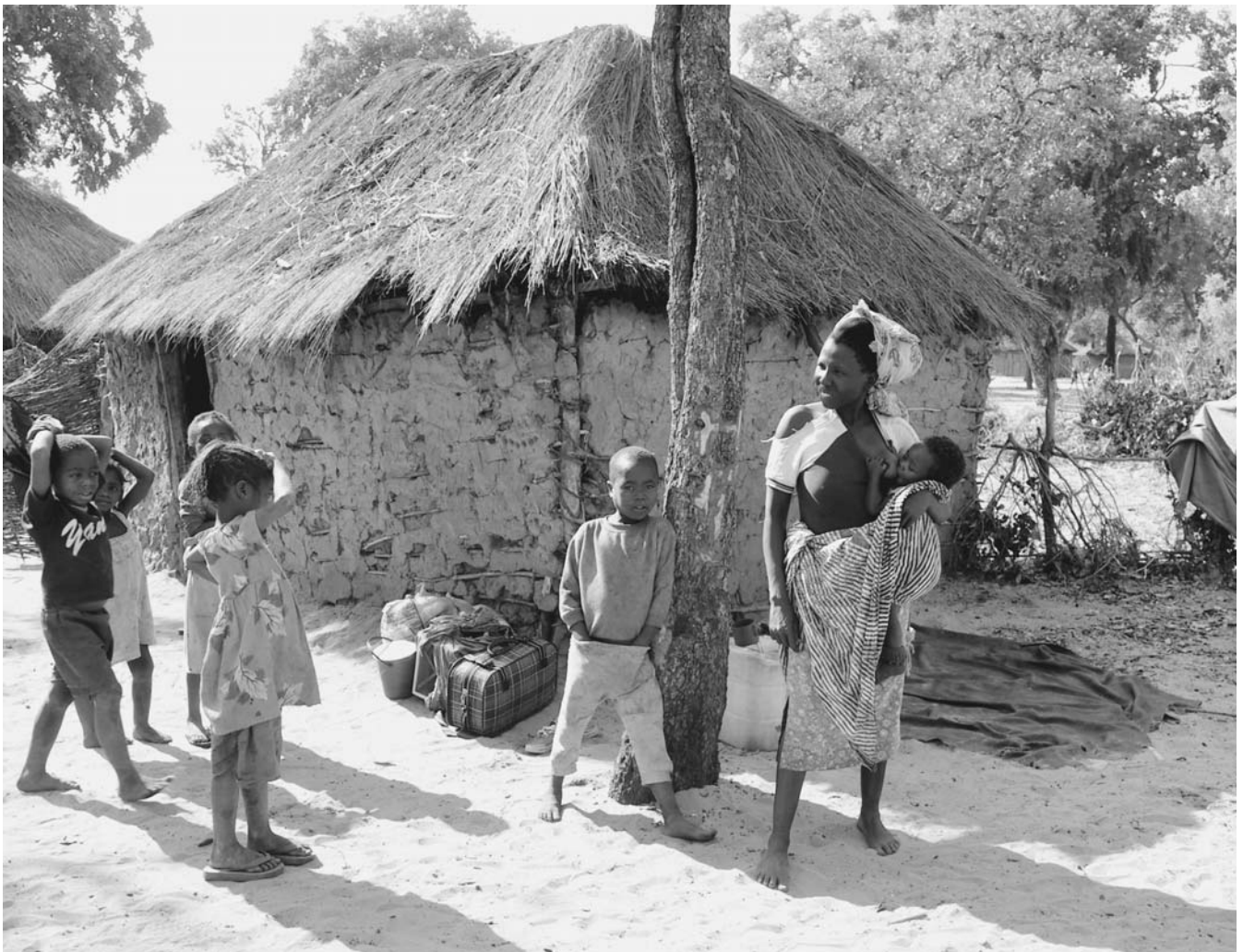
6月20日は「世界難民の日」



(国際的な支援のもと) 地元ザンビア住民とアンゴラ難民が協力して建設に関わることで、両者の融合が期待される 撮影：沼田早苗



(難民キャンプの近くに住む地元住民のために作られた農場用)井戸からくんだ水を畑にまく女性 撮影：沼田早苗



ザンビア南西部にあるナングェシ難民キャンプ 撮影：沼田早苗